

トルコ考古学この10年

三宅 裕

The Last Ten Years in Turkish Archaeology

Yutaka MIYAKE

キーワード：出アフリカ、DNA 解析、ギョベクリ・テペ、都市考古学

Key-words: Out of Africa, DNA analysis, Göbekli Tepe, Urban Archaeology

トルコ考古学の動向については、以前紺谷亮一氏との分担という形で本学会のニューズレターに紹介したことがある（紺谷 1998、三宅 1999）。当時は学会が設立されてから日も浅く、定期的に情報を発信できる場としてはまだニューズレターしかないような時代であった。それから10年近い歳月が経過し、今や学会の顔として順調に号を重ねる本誌に、再びトルコ考古学の動向を紹介する機会を得たことは、ある意味感慨深いものがある。この10年で本学会が大きく成長を遂げたように、トルコ考古学も新たな調査や発見を推進力として前進を続けてきた。本来ならばその全体像が掴めるような程度網羅的に記述すべきところだが、今回は紙幅の関係もあり、いくつかの事例に絞ってトルコ考古学のこの10年を振り返ってみることにしたい。

旧石器時代

旧石器時代については、トルコ国内に限定すると、特筆すべき進展はあまりみられなかった。黒曜石の原産地に位置するカレテペ (Kaletepe) 遺跡において前期旧石器時代にまで遡る層が確認され、アシュール型の石器群が出土したことを挙げられるぐらいである (Slimak et al. 2007)。しかし、隣国や周辺領域からはトルコの旧石器時代を理解する上で重要な発見や研究の進展がみられたので、ここではやや視野を広げてその内容について見てゆくことにしたい。

トルコとも国境を接するグルジアのドマニシ (Dmanisi) 遺跡では、1991年に化石人骨が発見されすでに注目を集めていたが、1999年以降にもほぼ完全な頭蓋骨を含む人骨が次々と見つかり、大きな話題となった。そして、その具体的な内容が明らかになるにつれ、当初の驚きは衝撃へと変わっていった (Gabunia et al. 2000, Vekua et al. 2002)。人類のアフリカからの旅立ち、すなわち「出ア

フリカ」をめぐるそれまでの考えに大きく変更を迫るものであったからである。ドマニシ遺跡の発見以前は、人類がアフリカを出たのは100万年前ごろのことで、大きな脳と現代的な身体プロポーションをもったホモ・エレクトスがそれを成し遂げたと考えられていた。また、洗練されたアシュール型のハンドアックスを装備していたことも、新しい環境に適応していく上で重要であったと解釈されてきた。

しかし、ドマニシ遺跡の内容はこうしたシナリオと真向から対立するものであった。まず、遺跡の年代が約180万年前であることが確認され、これにより「出アフリカ」の年代は一気に80万年近く遡ることになった。そして、その年代的な古さに見合うかのように、「出アフリカ」を成し遂げた主役も、まだかなり原始的な姿をとどめていたことが明らかになった。ほぼ完全な頭蓋骨から復元された脳容量は600～800cc程度にとどまり、これは初期のホモ・エレクトスと比べても小さいものである。形質的にもホモ・ハビリスとの類似が指摘されており、ホモ・エレクトスとの中間形態にあったとみる意見が強い。また、身長も140cm程度と推定され、それほど高くはなかったことが明らかになった。さらに、出土した石器にはハンドアックスが認められず、オールドワン型インダストリーに比定されるものであった。このように、脳も身体もまだ小さく、貧弱な石器しか持たなかった段階で人類がアフリカを旅立っていたという事実は、身体的にも技術的にも準備万端整ってから「出アフリカ」を敢行したとする従来の見解とはまったく相容れないものである。なぜ人類はアフリカを旅立ち、新たな環境に適応することができたのか、今新たな解釈が求められている¹⁾。

グルジアからこうした証拠が発見されたことで、アフリカからの北上ルート上に当たるトルコにもその段階の人類が足跡を残していた可能性が出てきたことになる。しかも、

彼らが旧ドワン型の石器群を伴っていたということは、そうした石器を手掛かりにその足跡を辿ることができるということでもある。実は、トルコ国内で旧ドワン型石器の存在が報告されたことは、これまでも何度かあった。しかし、一部の石器だけを取り上げたものであったり、層位的な裏付けを欠くものであったため、あまり真剣に取り上げられることはなかった。さらに、アシュール型の石器群が最古であるとする、従来の「出アフリカ」をめぐる考えが定説化していったことも多分に影響していたと思われる。ドマニシ遺跡での発見を受け、これらの石器の資料的価値が直ちに高まるというわけではないが、旧ドワン型石器の存在を頭ごなしに否定することもできなくなったことになる。ドマニシ遺跡の資料は、トルコを含め西アジアの旧石器時代がもう一段階遡ることを示した点でも、たいへん大きな意義があったと言えることができる。

旧石器時代に関連してもうひとつ取り上げておきたいのは、人類の遺伝子研究の進展である。ミトコンドリアDNA (以下 mtDNA) の解析によって、現生人類のアフリカ「単一起源説」が大きな後ろ盾を得たことはよく知られている。まだ「多地域起源説」との論争がくすぶっていた1997年には、ネアンデルタール人骨からDNA採取に成功したという驚愕の報告がなされ、長きにわたった論争にもほぼ終止符が打たれることとなった²⁾。mtDNAの解析に対しては、女性の系統しか辿ることができないという批判が常に付きまとっていたが、今ではY染色体の解析も進み、同じようにアフリカ単一起源を支持する結果が得られている。今世紀に入り、「単一起源説」はますます揺るぎないものとなったと言えるだろう。

しかし、DNAの解析はこれで役割を終えたわけではなく、今では系統地理学的研究、すなわち現生人類がどのようなルートをとって世界各地へ拡散していったのかという問題についても積極的に発言するようになってきている。その背景には、今世紀に入る頃からmtDNAの全塩基配列を用いた解析が行なわれるようになったことがある(篠田2007)。それによってハプログループのより詳細な分類・認定が可能となり、その系統関係の整理が進んだからである(図1)。アフリカ系以外の集団はすべて、ハプログループL3を共通の祖先とするハプログループMとNから派生していることが改めて確認され、さらにヨーロッパ系集団がアジアに分布するハプログループNの系統に連なることも示された。つまり、一部のアジア系集団の中からヨーロッパ系集団が派生したことになる。ヨーロッパ系集団の故地がアジアであるならば、次はヨーロッパへの拡散ルートや時期が焦点となり、その途上にあるトルコとも大いに関係が出てくることになる。

実際、ある研究者は現生人類の「(第二次) 出アフリカ」

とヨーロッパへの拡散の過程を以下のようにかなり大胆に復元している(オッペンハイマー 2007)。私たちに直接連なる祖先(ハプログループL3)がアフリカを出たのは約8万年前のことで、紅海を渡ってアラビア半島南岸を東進した後、ペルシア湾岸からインドにかけての地域でハプログループMとNに分岐した。そして、やや西方に分布していたハプログループNからハプログループUが派生し、5万年前にはザグロス山脈沿いに北上を開始、トルコを経由してヨーロッパに至ったという。さらに、この集団の移動はオーリナシアン石器群の広がりや深い関係があったと解釈されている。

興味深い説ではあるものの、その中にはこうしたアプローチが抱えている問題点もいくつか見え隠れしている。まず、ハプログループ間の系統関係は正しいものであったとしても、その分岐年代にはまだかなりの幅を想定せざるを得ないのが実状である。その年代幅のある程度狭め、拡散ルートを特定していくには、結局考古学的資料を参照する以外に方法はない。実際、後期旧石器時代においてトルコとザグロス地域との関係が深いことは、考古学的資料から指摘されていたことであり、この場合もそうした見解を取り入れた上での話ということになるのだろう。特定の物質文化の広がりを人間集団の移動に対応させている点は、DNAの解析とはまったく関係がなく、純粋な推論にすぎない。一対一で示される対応関係は、一見明快で小気味よささえ感じさせるが、かなり恣意的な面もあり、新たな装いで伝播論が復権してきたような危うさを感じてしまう³⁾。

こうした問題はあっても、ハプログループの系統関係に基づいて分子生物学から提示される見解を今後は考古学も意識しないわけにはいかなくなるだろう。古人骨のDNA解析がさらに進めば、より詳しい検討が可能になると期待される。DNA解析から導き出された仮説を検証で

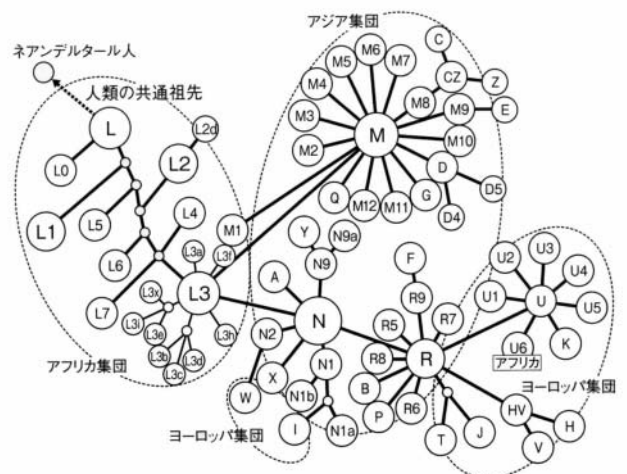


図1 mtDNAのハプログループ系統関係 (篠田2007: 図3-2)

きるのは、結局考古学的資料以外にはないわけで、両分野の協力によって精度を高めていくことができれば、人類の過去を探る大きな武器となるはずである。

ちなみに、分子生物学から得られる情報は、旧石器時代に限定されるわけではない。現代ヨーロッパ系集団のハプログループの構成が明らかになったことで、西アジアからヨーロッパへの人口流入は何波にもわたっていたことが分かってきた。特に、その中でも分岐年代の比較的新しいハプログループJの存在は、ヨーロッパにおける農耕牧畜の起源との関連で注目されている。ハプログループJが本当にヨーロッパに農耕牧畜を伝えた集団に由来するのであれば、伝播か独自発生かという次元での議論はもはや必要なくなることになる。

新石器時代

その新石器時代はトルコ考古学において今最も注目を集めている時代である。1999年には *Neolithic in Turkey* というトルコの新石器時代を1冊にまとめた本が出版され (Özdoğan and Başgelen 1999)、この時代を概観することが可能となった。その後も調査の数は着実に増加しており、それは2007年に出版されたこの本の増補改訂トルコ語版が、ほぼ2倍の厚みになっていることから実感することができる (Özdoğan and Başgelen 2007)。尚、英語による改訂版も現在出版に向けて準備が進められており、2008年には刊行されるとのことである。

これまで新石器時代のアナトリアは、とするとレヴァント回廊やユーフラテス中流域の周縁として位置付けられ、チャヨニユ (Çayönü) 遺跡の存在は古くから知られていたものの、新石器化をめぐる議論の中でアナトリアの遺跡が正面から取り上げられることはあまりなかった。しかし、そうした状況にもネヴァル・チョリ (Nevalı Çori) 遺跡やハラン・チェミ (Hallan Çemi) 遺跡の調査を契機として変化の兆しが見えるようになり、それに続くギョベックリ・テペ (Göbekli Tepe) 遺跡での発見によってアナトリアへの注目度は一気に高まることとなった。

ギョベックリ・テペ遺跡は、まずその立地からして特異なものである。標高約800mの山地の頂上部に位置し、周囲の眺望は素晴らしいものの、水源や耕作地などから遠く、日常生活を送るには不便な場所にある。さらに、そうした場所で特殊な建物ばかりまとめて検出されたことから (図2)、ギョベックリ・テペは一般の集落遺跡ではなく、祭祀センター的な性格をもつ遺跡だったのではないかと考えられるようになった (Schmidt 2001, 2006)。先土器新石器時代に属する2つの層が確認され、下層はPPNA (先土器新石器時代A) 期末からPPNB期初頭に、上層はPPNB期前期に位置付けられている。下層からは、発掘者

がエンクロージャーと呼ぶ円形の大型遺構が4基検出されている⁴⁾。その構造は、中央に2対のT字形の石柱が独立して立ち、周囲を囲むように円形の壁が巡るというもので、その壁にもT字形石柱が埋め込まれるような形で配されている。この石柱には、浅い浮彫り状に様々な動物や「記号」が刻まれている (図3)。上層になると建物の規模は縮小し、プランも矩形へと変化している。こちらにもT字形石柱は認められるが、建物全体と同様に小型化し、浮彫りが認められる例も少なくなる。

T字形石柱には腕や衣服の襟のような表現が認められる例があることから、基本的に人間、ないしは人の姿をした何らかの存在 (神や精霊など) を象ったものと考えられている。これに関連して注目されるのが、1980年代にウルファ市内から発見されていたほぼ等身長の男性彫像である⁵⁾ (Hauptmann 2003)。腕の位置やその様子、襟とみられるV字形の意匠など、T字形石柱との共通点が認められるからである (図4)。両手を男性器に添えていることから、この像が男性を表現したものであることは間違いなく、両者の共通点を重視するならば、T字形石柱も男性像であったと考えることができる。ギョベックリ・テペ遺跡からは小型の彫像も多数出土しており、その中には男性器を強調

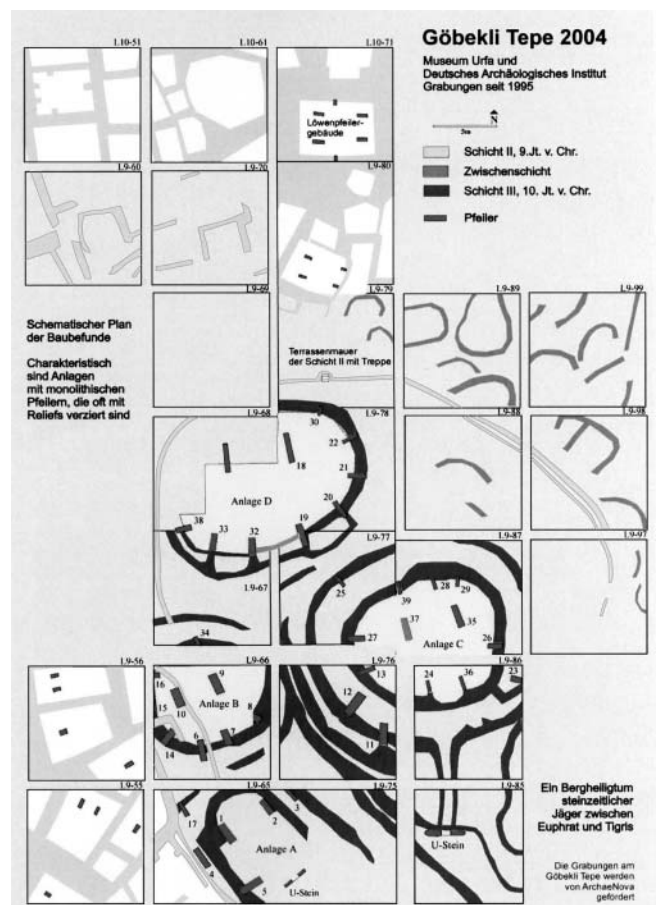


図2 ギョベックリ・テペ遺構分布図 (Schmidt 2006: Abb.76)

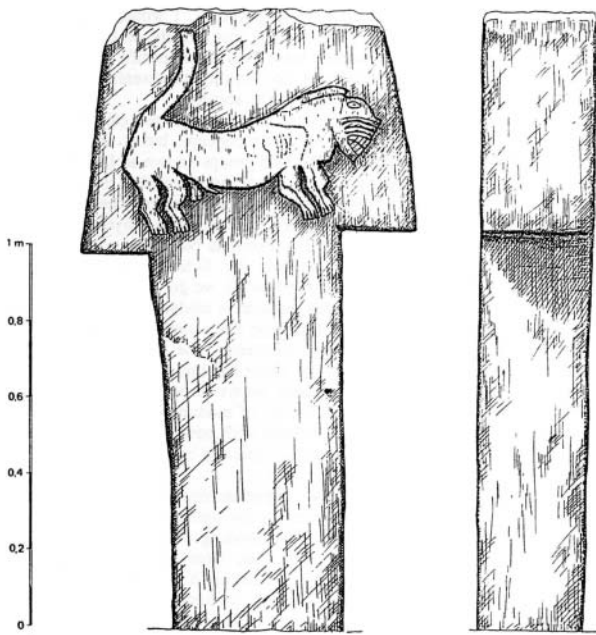


図3 ギョベックリ・テペ T 字形石柱
(Schmidt 1998: Fig.6)

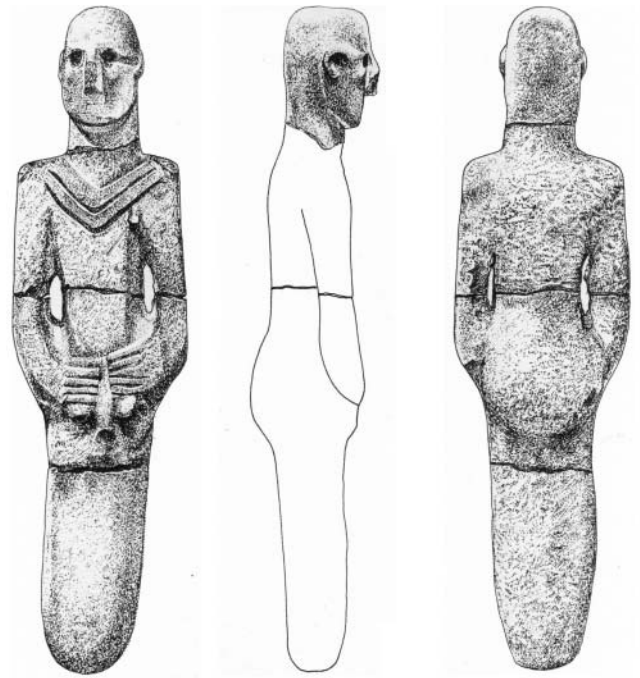


図4 ウルファ市内出土男性像
(Hauptmann 2003: Abb.1)

した人物像は認められるものの、女性像は一例も検出されていない⁶⁾。また、石柱に刻まれた動物像も、性別を特定できるものはすべて雄であった。人間も動物も圧倒的に男性原理が優越しており、これまでの新石器時代=地母神(女神)とするステレオタイプの図式とは相容れないものとなっている。こうした状況を受けて、先土器新石器時代に信仰の対象となっていたのは、女神ではなく男神であったという主張もみられるようになった(Özdoğan 2001)。

ギョベックリ・テペ遺跡で行なわれた儀礼がどのような性格のものであったかについては、T字形石柱にみられる動物像などを基に検討されている(Peters and Schmidt 2004)。まず可能性のあるものとして、狩猟儀礼、葬送儀礼、トーテミズムやシャーマニズムに関連する儀礼などが候補に挙げられている。T字形石柱に刻まれた動物は、その数の多いものからヘビ、キツネ、イノシシ、鳥の順となっており、もし狩猟儀礼であるのならば、遺跡から出土する動物骨でもこれらの動物が上位に来ると想定される。しかし、実際はガゼル、オーロックス(野生ウシ)、アジアノロバ、ヒツジ/ヤギ、キツネの順となっていて、うまく一致しない。したがって、狩猟の成功を祈願したとは考えにくいことになる。ちなみに、ヘビ、キツネ、鳥という組み合わせは、同時代のユーフラテス中流域にもよく認められるモチーフで、当時の神話的世界を表象したものである可能性も考えられる。また、遺構によって主体となる動物の種類に違いがみられることも指摘されている。これらの動物を各集団のトーテム標章と考えた場合には、ヘビ、キツネ、鳥の組み合わせが中心となる遺構はユーフラテス川

中流域の集団と、イノシシが主体となっている遺構Cは動物相においてイノシシの重要性が顕著なタウルス山脈南麓地域の集団と関係があると想定することもできる。もしそうであるならば、出自を異にする集団がギョベックリ・テペに集合し、自らのトーテムに関係した儀礼をそれぞれの遺構で執り行なっていたことになる。

儀礼の性格を解明するのは簡単なことではないが、ギョベックリ・テペ遺跡の調査によって新石器時代そのものに対する見方が大きく変化したことは間違いない。チャヨニユ遺跡だけでなく、ネヴァル・チョリ遺跡からも神殿と呼べるような公共的建築物が確認されたことで、それが決して特別なものではなく、先土器新石器時代においてはむしろ標準的な集落の姿である可能性が高くなった。こうした発見は、牧歌的で単純な農耕村落を思い描いていたそれまでの新石器時代観を根本から揺さぶるものであったが、ギョベックリ・テペ遺跡の内容はそれさえも霞んでしまうほどのインパクトを与えている。個々の集落レベルにとどまらず、複数の集落を統括するような高次の社会組織が存在していた可能性が浮かび上がってきたからである。さらに、南東アナトリアではギョベックリ・テペと同じ性格を持つと考えられる遺跡がほかにも確認され⁷⁾、それが唯一の存在ではなかったことも明らかになっている。

南東アナトリアにおいてこうした衝撃的な発見が続いたことにより、最近では農耕牧畜の起源をこの地域に求める意見までみられるようになってきた。その可能性はもちろん検討してみる価値があるが、ギョベックリ・テペ遺跡が

投げかけている問題は、実はもっと深いところにある。新石器時代は、もともと石器の技術的な特徴に基づいて定義されたものであったが、G. チャイルド (Childe) によって生産経済への移行がその重要な指標とされるようになったことはよく知られている。こうしたチャイルドの考え方は、西アジアやヨーロッパの考古学においては大きな影響力を持ち、農耕牧畜の開始が社会的に大きな変革をもたらしたとする考えは、すべての議論の前提ともなってきた。気候悪化や人口圧などを農耕開始の要因と考える「ストレスモデル」も、基本的にはその枠から出るものではなかった。しかし、新石器時代の調査が進むにつれて、少なくともPPNA期には植物栽培も家畜化もまだ確立されていなかったことが明らかになってきた。実際、ギョベクリ・テベ遺跡でもそうした証拠は認められない。これを単に「看板」だけの問題とみることもできるかもしれない。つまり、PPNA期を新石器時代から外してしまえば、すべて解決するという考え方である。しかし、その場合でも、ギョベクリ・テベ遺跡から明らかになった複雑な社会は、いったい何が要因となって形成されたのかという問題は残ることになる。これを農耕牧畜といった生業の変化に求めることができないのは、もはや明らかである。さらに、農耕牧畜の証拠が出揃う先土器新石器時代末になると、「新石器時代の崩壊」と呼ばれるように、集落規模の縮小、威信財の減少、公共的建築物の消失など、むしろ社会的に衰退したような様子が窺われる。社会に本質的な変化をもたらしたのは生業ではなく、J. コヴァン (Cauvin) が指摘したように人間の認知的側面にあるということなのだろうか (Cauvin 2000, Lewis-Williams and Pearce 2005)。社会の変化と生業の関係が、あらためて問い直されていると言えるだろう。

尚、2007年にドイツのカールスルーエにおいてギョベクリ・テベ遺跡からの資料を中心に、トルコの新石器時代をテーマとした展覧会が開催された。レプリカによる遺構の展示もあり、印象的な展示であったとの評価も耳にしている。ドイツらしく大部の展示カタログもそれに合わせて出版され、内容的にもレベルの高い原稿が数多く掲載されていて、トルコの新石器時代を理解する上で貴重な資料となっている (Badisches Landesmuseum Karlsruhe 2007)

都市考古学

現代社会の多くが抱えている人口の増加と都市への集中という問題は、トルコにとっても例外ではない。特に、長い歴史を誇るイスタンブールのような都市の場合には、市街地の再開発やインフラ整備と文化財の保護の問題は、どうしても時に鋭く対立せざるを得なくなる。「都市考古学」とも呼ばれるこうした分野は、トルコにおいてはこれまで

体制の整備もあまり進まず、どちらかというと立ち遅れていた観があった。しかし近年ではイスタンブール市役所が文化財担当の専門職員の採用を始めるなど、行政側の対応にも新たな動きが見られるようになってきた。

現在イスタンブールでは、慢性的な交通渋滞の解消を目指し、ボスポラス海峡にトンネルを通してアジア側とヨーロッパ側を鉄道で結ぶ「マルマライ・プロジェクト」が進行中である。ちなみにこのプロジェクトには「地図に残る仕事」というCMで知られる日本の建設会社も加わっており、小泉首相がトルコを訪問した際に、その起工式に参加する姿がニュースでも流された。この計画では既存の鉄道路線をなるべく活用し、新規に建設する路線もシールド工法による地下路線を採用するなど、遺跡破壊をなるべく抑えようという配慮が認められる。とはいえ、その路線はまさにイスタンブールの旧市街を横断するような形になっており、新たに駅が建設される場所では遺跡の破壊は避けられない。

そのひとつイェニカプ駅の建設予定区域は、ビザンツ時代の主要港であったテオドシウス港があった場所に当たることが判明し、2004年からイスタンブール考古学博物館を中心に発掘調査が実施されている。テオドシウス港は、これまで断片的な資料からその存在は知られていたものの、15世紀にはすでに土砂によって完全に埋没し畑となっていたということ以外、その詳細についてはよく分かっていなかった。連絡する地下鉄駅の部分も含めて32,000 m²にも及ぶ範囲の発掘調査が始まると、城壁や港湾施設の遺構、嵐によって沈没したと思われる船が多数発見され、大きな注目を集めることとなった (Istanbul Arkeoloji Müzeleri 2007)。

発掘調査の結果、紀元後4世紀後半に整備されたテオドシウス港は、1) 4世紀から7世紀にかけて早くも黄金期を迎え、東地中海から黒海までの広範な地域から様々な物資が集まっていたこと、2) 7世紀以降は地中海の制海権をアラブ人に奪われ、交易圏は縮小したものの、依然としてエーゲ海や黒海を舞台とした海上交易の中心となっていたこと、3) 河川からの土砂の堆積に悩まされ、次第に規模を縮小する形でその中心が東側へと移っていったこと、などが明らかになった。しかし、今回の発掘調査の最大の成果は、何と言っても港に堆積していた土砂の下から24隻もの船が発見されたことである。7世紀と9世紀に年代付けられている3隻以外は、すべて10世紀末ないし11世紀初頭のものであった。これらは、テオドシウス港にとどめを刺す形となった激しい嵐の際に、同時に沈没してしまったものとみられている⁸⁾。中には積荷であるアンフォラなどを満載したまま沈んでいる船もあった。

船の詳細な内容が明らかになるにはまだ時間がかりそう

だが、全長が15m程度で比較的幅のある船(1本の帆柱を持つ)と全長30mほどの細長い形をした船の少なくとも2種類あることが分かっている。前者は近距離を岸伝いに航行する商船であったとみられ、後者は多数の漕ぎ手によって高速で航行する軍用船であった可能性が指摘されている。これまでもビザンツ時代の船としては、ヤッス・アダ(Yassı Ada)やセルチェ・リマヌ(Serçe Limanı)での例が知られていたが、その数はごく限られたものであった。今回これほどの数の船がまとまって発見されたことで、当時の造船技術や船体構造について詳細な情報が得られるものと期待されている。特にこの時代は、伝統的な外板主体構造から肋材主体構造へと船の構造が大きく変化する時期に当たっており、船舶史にとっても貴重な資料となることは間違いない。

こうした成果はトルコのマスコミにも大きく取り上げられ、一般の市民も高い関心を寄せている。それに後押しされるような形で、新駅のプランも遺跡の状況に合わせて変更が検討されており、遺跡の一部も史跡公園として保存される計画もあるようである。アテネの地下鉄駅やメキシコシティでの例に倣い、遺跡と現代の施設が共存できるような形を目指していると聞く。駅が完成した時にどのような姿になるか楽しみでもある。イェニカプ駅以外にも、シルケジ駅やアジア側のウスキュダル駅の建設予定区域でも発掘調査がおこなわれており、またこれとは別にかつてビザンツ時代の宮殿が存在していたスルタンアフメット地区の旧刑務所跡でも発掘調査が進められている。今後こうした調査がさらに増えていけば、イスタンブールの地下に眠るコンスタンティノーブルの姿が徐々に明らかになっていくものと期待される。

トルコ考古学全体の動向

ここまでトルコ考古学の動向について述べてきたが、結局時代的にもかなり偏りのあるものとなってしまった。トルコ考古学のこの10年の進展は、決して本稿で紹介した事例にとどまるものではなく、今回触れることができなかった青銅器時代や鉄器時代に関しても数多くの成果が挙げられている。そうした全体像について知りたい方は、以下で紹介する文献やウェブサイトを参照していただきたい。

最も詳細なものは、今年で第30回を迎える発掘調査シンポジウムの報告集(*Kazı Sonuçları Toplantısı*)で、第1回以来毎年途切れることなく出版されている。しばらく途絶えていたAmerican Journal of Archaeology誌上でのトルコ考古学の動向記事も昨年復活し、2004-05年の動向を押さえることができる(Yıldırım and Gates 2007)。またCurrent Archaeology in Turkeyというウェブサイトでも、トルコ国内で実施されている発掘調査の最新情報を得

ることができる。

このほか、前回紹介したTAY(トルコ考古学遺跡)プロジェクトも、さらに規模を拡大しながら順調に活動を続けている。遺跡カタログは旧石器時代から青銅器時代前期までの4つの時代がすでに刊行されていたが、つい最近鉄器時代もこれに加わることとなった。さらに、ギリシア・ローマ時代の遺跡とビザンツ時代の建築についても、地域ごとに分冊化され、その刊行が始まった。これらはトルコ語版のみ利用が可能であるが、TAYのウェブサイトでは旧石器時代から青銅器時代前期まで、英語版による遺跡データベースの閲覧が可能となっている。

本稿執筆中にイスタンブール大学のウフック・エシン元教授の訃報に接した。エシン教授は、ケバン・ダム水没地域での調査を皮切りに、数多くの発掘調査を手がけられ、トルコ考古学を常にリードする存在であった。氏の薫陶を受けたひとりとして、心よりご冥福をお祈りしたい。

註

- 1) 「出アフリカ」の問題も含め、人類の進化の研究動向については、日本語でまとめられた優れた内容の本が出版されている(内村2005、河合2007など)。
- 2) 最初に発見されたネアンデルタール人、すなわち19世紀にドイツのネアンデル渓谷で見つかった骨からDNAが採取されたもので、解析の結果、現生人類との間には直接の系統関係は認められないと結論付けられた。その後も、別の遺跡のネアンデルタール人骨からもDNAが採取され、やはり同様の結果が得られている。
- 3) オーリナシアンだけでなく、グラヴェティアンも、西アジアから移住してきた集団によってヨーロッパにもたらされたと主張されている(オッペンハイマー2007:171)。もちろん、そうした可能性もあるのかもしれないが、文化変化をすべて人間集団の移動によって説明してしまおうという姿勢には疑問を感じざるを得ない部分もある。
- 4) ただし遺構Aについては、矩形に近いプランであったようである。
- 5) この像は時代不明のまま博物館に収蔵されていたが、近年出土地点の調査がおこなわれ、先土器新石器時代のものであることが確認されている(Çelik 2007)。
- 6) 女性を表現したものは、これまでのところ板石に刻まれた出産シーンに登場する1例しか見つかっていない。
- 7) そのひとつカラハン・テペ(Karahan Tepe)遺跡は、やはり山地の頂上部に位置し、T字形石柱の存在も明らかになっている(Çelik 2000)。
- 8) 10世紀末ないしは11世紀初頭に襲来した激しい嵐は、海側からも大量に砂を堆積させ、テオドシウス港に最後の一撃を加えたとみられている。これ以降主要な港は、マルマラ海側から金角湾側へと移っていったようである。

参考文献

- Badisches Landesmuseum Karlsruhe 2007 *Vor 12.000 Jahren in Anatolien. Die ältesten Monumente der Menschheit*. Karlsruhe.
- Cauvin, J. 2000 *The Birth of the Gods and the Origins of Agriculture*. Cambridge, Cambridge University Press.

- Çelik, B. 2000 A New Early-Neolithic Settlement: Karahan Tepe. *Neo-Lithics* 2-3/00: 6-8.
- Çelik, B. 2007 Şanlıurfa Yeni Mahalle-Balıkligöl Höyüğü. In M. Özdoğan ve N. Başgelen (eds.), *Türkiye’de Neolitik Dönem: Yeni Kazılar, Yeni Bulgular*, 165-178. Istanbul, Arkeoloji ve Sanat Yayınları.
- Gabunia, L., Vekua, A., Lordkipanidze, D. et al. 2000 Earliest Pleistocene Hominid Cranial Remains from Dmanisi, Republic of Georgia: Taxonomy, Geological Setting, and Age. *Science* vol. 288 no. 5468: 1019-25.
- Hauptmann, H. 2003 Eine Frühneolithische Kultfigur aus Urfa. In M. Özdoğan et al. (eds.) *From Village to Cities: Early Villages in the Near East. Studies Presented to Ufuk Esin*, 623-636. Istanbul, Arkeoloji ve Sanat Yayınları.
- Istanbul Arkeoloji Müzeleri 2007 *Gün Işığında: İstanbul’un 8000 Yılı. Marmaray, Metro, Sultanahmet Kazıları*. Istanbul, Vehbi Koç Vakfı Yayını.
- Lewis-Williams, D. and D. Pearce 2005 *Inside the Neolithic Mind: Consciousness, Cosmos and the Realm of the Gods*. London, Thames and Hudson.
- Neef, R. 2003 Overlooking the Steppe-Forest: A Preliminary Report on the Botanical Remains from Early Neolithic Göbekli Tepe (Southeastern Turkey). *Neo-Lithics* 2/03: 13-16.
- Özdoğan, M. 2001 The Neolithic Deity, Male or Female. In R. M. Boehmer and J. Maran (eds.), *Lux Orientis: Archäologie zwischen Asien und Europa. Festschrift für Harald Hauptmann zum 65. Geburtstag*, 313-18. Rahden, Verlag Marie Leidorf.
- Özdoğan, M. and N. Başgelen (eds.) 1999 *Neolithic in Turkey: the Cradle of Civilization, New Discoveries*. Istanbul, Arkeoloji ve Sanat Yayınları.
- Özdoğan, M. and N. Başgelen (eds.) 2007 *Türkiye’de Neolitik Dönem: Yeni Kazılar, Yeni Bulgular*. Istanbul, Arkeoloji ve Sanat Yayınları.
- Peters, J. and K. Schmidt 2004 Animals in the Symbolic World of Pre-Pottery Neolithic Göbekli Tepe, Southeastern Turkey: A Preliminary Assessment. *Anthropozoologica* 39: 179-218.
- Schmidt, K. 1998 Beyond Daily Bread: Evidence of Early Neolithic Ritual from Göbekli Tepe. *Neo-Lithics* 2/98: 1-5.
- Schmidt, K. 2001 Göbekli Tepe, Southeastern Turkey. A Preliminary Report on the 1995-1999 Excavations. *Paléorient* 26/1: 45-54.
- Schmidt, K. 2006 *Sie bauten die ersten Tempel: Das rätselhafte Heiligtum der Steinzeitjäger*. München, C. H. Beck.
- Slimak, L., Kuhn, S., Balkan-Atli, N., Binder, D. Grenet, M. et B. Dinçer 2007 Kaletpe Deresi 3: de l’Acheuleen au Moustérien en Anatolie Centrale. *Anatolica Antiqua* XV: 257-273.
- Vekua, A., Lordkipanidze, L., Rightmire, G. P. et al. 2002 A New Skull of Early *Homo* from Dmanisi, Georgia. *Science* vol. 297 no. 5578: 85-89.
- Yıldırım, B. and M.-H. Gates 2007 Archaeology in Turkey, 2004-2005. *American Journal of Archaeology* 111-2: 275-356.
- 内村直之 2005 『われら以外の人類：猿人からネアンデルタール人まで』朝日新聞社。
- オッペンハイマー、ステイーヴン 2007 『人類の足跡 10 万年全史』（仲村明子訳）草思社。
- 河合信和 2007 『ホモ・サピエンスの誕生』市民の考古学 3 同成社。
- 紺谷亮一 1998 「アナトリア考古学への招待 (1)」『日本西アジア考古学会通信』4: 20-23.
- 篠田謙一 2007 『日本人になった祖先たち：DNA から解明するその多元的構造』日本放送出版協会。
- 三宅 裕 1999 「アナトリア考古学への招待 (2)」『日本西アジア考古学会通信』5: 16-21.

三宅 裕

筑波大学大学院人文社会科学研究科

Yutaka MIYAKE

University of Tsukuba